



ホールの能舞台上で「是界」を上演

能の魅力を多角的に体験
オープンハウスに人気

エコルマホール全館を利用して行うイベント「ふらっとエコルマ、オープンハウス」が11日回に催された。8回目の今回は「遊べる、学べる“能図鑑”」と題し、約300人の入場者たちは日本を代表する伝統芸能の魅力

を味わっていた。狛江能楽普及会の協力で催したもので、4階ホールに本格的な能舞台を再現、素謡

外国人と身近に交流
異文化交流フォーラム

平成29年度行政提案型市民協働事業の「東京オリンピック・パラリンピックを活用した取組み」として、外国人との身近な交流に向けた取組みが行われた。

2020年に狛江市が市制50周年の節目を迎えるため、市民目線の事業を展開しようと市企画財政部政策室が市民団体に呼びかけて実施されたもの。

昨年12月10日回には、平和祈念事業実行委員会が主催して、中央公民館で異文化交流フォーラム「狛江の中の外国

ちょっとのぞいてみませんか」をテーマに、市内在住5人を含む8カ国9人の外国人がパネリストになり、市民45人が参加



異文化交流フォーラム

「翁」、半能「是界」を上演したほか、ワークショップに参加した小学生から70代までの23人が昨年12月から練習してきた謡、笛、小鼓を披露した。

このほか、小鼓、笛などの楽器、能面、長刀、袴などに実際に触れる体験や、能にまつわる講義も行われた。参加者には若い人も多く、普段接する機会が少ないだけに熱心に質問したり、説明に耳を傾けていた。また、若い女性に人気のコミッ

して日本での暮らしや日本文化とそれぞれの母国との違いなどを話し合うディスカッションが行われた。

ディスカッションは2部に分けて行われ、外国人からは、日本での衣食住や交通機関などについての感想や、オリンピック・パラリンピックに向けて外国語の学習や積極的な交流の必要性を訴える声が聴かれた。

参加者からは、外国人と気軽に話ができたことを評価する声が多く出された。

市では、こうした要望を受けてさらなる気運醸成に向けた取組みを進めたいと話している。

ク「能面女子の花子さん」の複製原画の展示に加え、若い女性能楽師が小面を付けリアルな花子さんに扮して会場をまわり、来場者の人気を集めていた。

西河原自然公園活用を
10日にワークショップ

「狛江・まちづくり市民会議（岡部順代表）が、10日午後2時～4時に西河原公民館で西河原自然公園をテーマにしたワークショップ「みんなのe場所つくろう」を催す。

狛江市テーマ型まちづくり協議会として市の支援を受けて催すもので、プレーパーク、とんぼ池公園、多摩川河川敷などの事例について関係者が報告、それを基に西河原自然公園の活用方法について参加者がアイデアを出し合う。

問い合わせ ☎3480-6794 絹山さん

25日に「さくらカフェ」
南部地域センターで初

南部地域センターで25日正午～午後3時に「南部さくらカフェ」が催される。

地域の住民だけでなく、多摩川を散策する人などに同センターを知ってもらおうと初めて催すもの。中庭を開放し、ジャズやカントリー、ギター、フルート、ピアノ、大正琴などさまざまなジャンルの生演奏を聴きながら、コーヒーやケーキ、ビール、焼きそばなどを楽しめ

る。入場無料で雨天決行。問い合わせ ☎3489-2150 南部地域センター。

春の火災予防運動実施
4日に消防ふれあい広場

「火の用心 一人一人の心掛け」を合い言葉に1日～7日間に春の火災

予防運動が実施される。

狛江消防署では4日午前10時～午後2時に同署で「消防ふれあい広場」を開催、はしご車搭乗体験、ミニ防火衣の着脱、綱渡り体験などを行う。6日午前11時～11時30分には狛江市役所で同署、狛江市消防団などによる消防演習、狛江市役所職員による自衛消防訓練を実施する。問い合わせ ☎3489-0119 狛江消防署。

ヘアドネーションに関心
和泉多摩川美容室

和泉多摩川駅近くの2件の美容室が、病気や事故などの治療で頭髪を失った子ども用のウィッグ(カツラ)として髪の毛を提供するヘアドネーションを行っており、提供する人が増えている。

美容室「Nap(ナップ)」(東和泉3-10-5、☎3480-5099)を営む店主の茂木一晴さんは、2年前に市内で初めてヘアドネーションを始めた。茂木さんは、15年前に開店した時から客の求めに応じて部分カツラやヘアピース、ウィッグのセットなどを行ってきた。また、自分の母ががんにかかったことをきっかけに医療用のウィッグも扱うようになった。川崎市在住の茂木さんは同市の美容師のボランティアグループに所属、活動を通してヘアドネーションを知って取り組みを始めた。

子ども用のカツラを作るには31センチ以上の長さが必要だが、短い場合でもヘアピースなどに使えるという。これまで10人以上の人が協力、母親が協力したのを見て、自分も提供しようと髪を伸ばし始めた女の



◆64◆

狛江団地(都営狛江アパート)の商店街にあるマルミヤ(和泉本町4-7-24-107)は、ことし創業50年を迎える和菓子店。

店主の西宮由勝さん(84)は秋田市の農家の三男に生まれ、中学校を卒業して実家の農業を1年ほど手伝った後、上京して新聞販売店に勤めた。その後、いくつか仕事を経験、25歳で板橋区の印刷会社に就職、職場に慣れた頃、同じ秋田市出身の伊サ子さん(82)と結婚した。業務は順調で生活も安定していたが、仕事の将来性を感じられなかったという。

そうした折、東京都が狛江町(当時)に建設する狛江団地の店舗付き住居に



西宮由勝さん

子もいるという。

「Que sera sera(ケ・セラ・セラ)」(東和泉4-3-7 ☎3430-1869)でも、1年前からヘアドネーションに取り組みを始め、これまでに60人が協力した。代表の橋田忠浩さんによると「長い髪を切るきっかけにする人や髪の長さを競争している姉妹もおりヘアドネーションへの関心が高い」と話している。両店とも、提供された髪の毛は、医療用ウィッグを子どもに贈る活動を行っている特定非営利活動法人ジャパンヘアドネーション&チャリティー(大阪市)へ送っている。

たい焼や餅菓子など手作りの和菓子を販売

マルミヤ

応募、90倍という高倍率だったが当選した。10年勤めた会社を辞め、同アパートの第1期入居に合わせて昭和43年に転居するとともに、仕入れが簡単そうという理由でパンと袋菓子を販売する店を始めた。同時に開店した10数件の店舗は食料品店、電気店などで、パンと菓子を売る同業の店もあった。

開店当時、団地周辺は商店が少なかったこともあり、店は繁盛したが、2、3年後に調布市内の同業者からたい焼とたこ焼を勧められて焼き方を習い機械を導入した。販売を始めたところ大ヒットとなり、開店前に行列ができ、朝8時から約12時間もたい焼とたこ焼を作り続けたため、昼食も取れず、体重が減って過労で倒れそうになったという。そのため、妻の伊サ子さんが家事や子育てをしながらパンや袋菓子などを販売したという。商売のおもしろさを知った由勝さんは、開店から数年後にさらに自家製造品を増やそうと考え、餅菓子の作り方を

学んで、新しく機械を導入し、みたらし団子、草団子などのほか、あん入り丸餅、草餅などの製造販売を始めた。餅菓子も好評で、注文に合わせ桜餅、柏餅など季節に合わせて作る種類を増やした。また、祝い事に使う赤飯、正月用の餅なども作るようになり、年末は注文を受けた餅を作るため、深夜まで店を開くこともあったという。団地は世帯数も多く、50年代までは入居者の多くが子どものいる家庭で、手頃な値段で求められる同店の菓子は子どものおやつとして好評だった。

「手作りの和菓子は作り置きをしない」のが同店のモットーで、保存料などの添加物を使っていないため、天気などに合わせて前日に材料を準備し、当日の朝に作ってその日のうちに売り切るようにしている。夕方には和菓子を割り引き販売するタイムサービスが人気だ。現在は、団地の住民だけでなく、市内外から訪れる人も多いという。

由勝さんは「体に気をつけて、いつまでもお菓子を作って」というお客さんの声がうれしくて励みになっています。体の続く限り続けたいです」と話している。

マルミヤ ☎3489-3392 営業時間=午前8時～午後6時30分。木曜休み

昭和43年に狛江団地内に脱サラして開店／たい焼、たこ焼がヒット

絵手紙事業10周年を記念し絵手紙モニュメント

絵手紙事業の10周年を記念した絵手紙モニュメントが狛江郵便局に立てられた。モニュメントは「絵手紙発祥の地-狛江10周年記念実行委員会」が寄贈したもので、幅120センチ、高さ85センチで、アルミ製の板に市内在住の絵手紙作家小池邦夫さんのかいた「一杯の水で人が生き返るように一通の

絵手紙で生き返る」という言葉に、魯山人の土瓶の絵がかかれており、高さ125センチの支柱に取り付けられている。モニュメントの左には、昭和56年に小池さんが絵手紙教室を開いたことを記念したメモリアルポストもあり、絵手紙愛好家や市民の人気を集めそうだ。



絵手紙モニュメントの除幕

2月3日日に催された除幕式では、小池さんや水野穰副市長、加藤誠一郎狛江郵便局長らがモニュメントの除幕を行った。小池さん

ひらがね
絵手紙の輪

は「手紙は古いという見方をしますが、手紙には人間の心を元気にしてくれる力があります。このモニュメントとメモリアルポストが手紙の良さを見直すきっかけになれば」と話していた。

昨年9月に10周年記念事業として小池さんの講演会やスタンプラリーなどを進めてきた曾根嘉七委員長ら実行委員たちは、絵手紙の普及に向けて今後もさらに充実した活動を行っていきたいと意欲をみせていた。